

---

# V S 義妹な日々なのか？

菊太間郎

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

VS 義妹な日々なのか？

### 【Zコード】

Z3190D

### 【作者名】

菊太間郎

### 【あらすじ】

ある日部屋に戻ると見知らぬ可愛い女の子が！親父に電話すると再婚したから義妹だと言った。何も聞いてないんですけど…しかも、一緒に住めだつて！なにより、ぜんぜんかわいらしくないんですけど…そんなこんなで義妹とその他に振り回される日々のコメディ

## 1日目 義妹参上

今日もいつも通り家に帰り、明日から始まる高2の新学年のことを  
考えてため息をついて

親から離れて一人暮らし中の俺がアパートの部屋にはいると

なんか、かわいい女の子がいました。

それも、裸で

とりあえず、ドアを閉めました。

表札に自分の名前が書かれているのを確認して

10回ほど深呼吸してドアを開けました。

女の子がいました。

テレビを見ながらプリンを食べてました。

「あの～誰ですか？」

「女の子はまだいらっしゃって

「まあ、とりあえず入れば？」

と言いました。

かしごまつて中に入つた僕に

「 やあ、義兄さん。今日からようじくね。」

笑つて言つました。

とつあえず、コップに水を入れて飲みました。

そして、携帯を取り出しました。

「 ん？ 義兄さん。なにじてるの？」

「 警察に電話。不審者がいますって。」

女の子は、ボタンを押したした僕の腕から携帯をもぎとりました。

そして、逆にボタンを押して電話を始めました。

「 あ、もしもし義父さん？ ちゃんと義兄さんに説明したの？ なんか、私のこと不審者として警察に通報しようとしてるんだけど？ ・・・え、言つてない？ も、電話代わるから説明してよ。」

電話が渡されました。

電話に出ると親父の声が聞こえてきました。

「 やあ息子よ。元氣にしてるかい？」

「 なんか、変な子がいるんだけど。」

「ははは、おまえには言つてなかつたが、実は父さん再婚したんだ。だから、その子は間違いなくお前の義理の妹だ。」

「ううう、俺も耳がおかしくなつたらしく。」

なんだか再婚とか義理の妹とか聞こえてるぞ。

「それでだな、その子、お前の高校に進学予定だから一緒に住んでくれ。よかつたじゃないか。義理の妹だぞ、同居だぞ。ギャルゲーみたいじゃないか！ ううやましい限りだ。それじゃあ、そういうことだから・・・」

「ツツツ・・・・・ツツツツツ

携帯を閉じてテーブルに置いた。

「で、どうだつた？」

「まじで？」

「うふ、まじ。よろしくね義兄さん。」

握手を求められる。

とりあえず握り返した。

「私、アヤナ。」

「俺はケイタ。」

なんだかよくわからないが俺には義妹ができたらしい。

「そういえば、なんで裸だったんだ？」

「いや、なんかインパクトのある出会いを演出して、わざわざ風呂にまで入つてみたんだけど。思ったよりおもしろくないリアクションだったかな。」

なんかダメ出しまでへりつて落ち込んだ俺はあることに気づいた。

「その、プリン……」

「ああ、冷蔵庫に入つてたからもうつたよ。」

「それ、俺が楽しみにしていたプリン。」

俺が一日の楽しみにしていたプリンはすでに食べ終わつた後だつた。

「ああ、私今日16才の誕生日なんだけど……」

「俺も今日17の誕生日なんだけど……」

まさか、誕生日が同じとは

いやいや、その前に誕生日の自分へのプレゼントとして残しておいた俺のプリンが！

「・・・・・さつ寝るか。義兄さんも明日から学校なんだから早めに寝ないと遅刻するよ。」

アヤナはベッドに入った。

なんだか、してやられた気分で風呂に入つて

風呂から出た時に気づいた。

僕の寝る場所ベッドが取られていって

文句を言おうと思ったがすやすやと寝息を立てるアヤナを見ると起こす気にはなれずに

大人しく床に布団を敷いて潜り込んだ。

そのとき、後ろからフツと勝ち誇ったような笑いが聞こえたのは気のせい・・・・だよな？

## 2日目 ケッドモーニング義妹

「せひほり義兄さん。起きて起きて。」

なんか誰かの声がする。

そんなはずはないよな俺一人暮らしだし。

もひひひと寝よ。

「ちよっと義兄さん！ 遅刻しちゃひよ。私、入学初日から遅刻なんて嫌よ！」

義兄さんって誰だよ。

俺は一人っ子だよ。

俺、寝ぼけてるのかな。

「義兄さん。そろそろ起きてくれないと起しきたの定番のあれ、やつちやうひよ？」

起しきたの定番のあてと云々ば、やつぱりあんなことやうことなどだりうか。

・・・・甘口い、なんて甘美で卑猥な朝なんだ！

ぜひ、ぜひともやつてくれ！

ザバア

冷たい、冷たいぞ！

ガバッ

「な、なにするんだアヤナ！水をかけるなんて！」

バケツで水をかけられて布団も俺もびしょびしょになっていた。

起しあかたの定番つてこれか？

こんななのなか？

「アヤナ！起しあかたの定番つてのはだなあ・・・」

「義兄さん。」

アヤナを見るとアヤナが妙にニコニコと笑つてゐる。

あ、おでこに血管が浮き出でている。

あ、怒つてゐる。

アヤナは時計を指し示した。

8時。

学校までは走つて20分。

HRは8時半から。

かなりきつかりである。

視線をアヤナに戻すと

アヤナは握り拳を作つて、手をわなわなと震わせていた。

「私、7時に起きて、義兄さんの分も朝ご飯作つて、7時半には義兄さんを起こし始めたんだけど……」

怖い、顔だけが笑つていて怖いです。

「ぐ、グッドモーニング。いい朝だねアヤナ。」

ひきつった笑顔で言つと

顔にパンチが飛んできました。

その後、鼻にティッシュを詰めて学校まで走つて行きながら

俺の考える甘口の朝の正しい起こしかたを教えると

またパンチが飛んできました。

## 3回目 曜休み

そう、それはいつも通りの曜休みだったはず、やつがいなければ

「ねむ~。」

曜休みになり、俺は疲れ果てて机に倒れていた。

いやしかし、早く行かなければ購買のパンが売り切れてしまつ。

そつ思い体を起しあつとした、そのとき

「義兄わ~そ。」

やつが・・・・やつなのか?

教室の入り口に田を向けると

やつが「ひづを見て手を振つている。

なぜお前がここにいる義妹よ。

1年と2年の校舎は違つだつが

そんなことも気にせずにやつは俺の前まで来た。

「なんのようだアヤナ。」

「「れだよ」れ。」

と俺の机にじんと何かをおいた。

弁当箱だつた。

「俺はいつも購買でパンを買つてくるんだけど。」

「だめだよ義兄さん。ちやんとしたもの食べないと栄養が偏るんだから。」

ふむ。一理ある。

しかし！

お前がこんな気の利いたことをするはずもあるまい。

何をたくさんでこな義妹よ。

む？誰か来た。

「ケイタ、このかわいい子だれ？」

「こつは俺の友達でタクヤ。

小学校からの腐れ縁だ。

そして横でうんうんと頷いているのがクラスの委員長のハルカ。

勘違いの激しい難しいやつだ。

とりあえず事情を説明した。

「なるほどね～お前の親父さんならあつえるかもな。」

「で、でも。義妹って言つても年頃の男女が同棲つて大丈夫なの？」

「ああ、今のところ大丈夫だよ。なあ、アヤナ。」

ポツ

・・・・なぜうつむいて頬を赤らめるか！

「ええ、なんとか・・・。それでね、義兄さん。」

「なんだ？」

「いつもごめんね。私がベッドがいいなんて無理言つから、でも私は痛いのはちょっと・・・。義兄さん、腰とか痛くない？」

うん？

なんか受け取りかたを間違えれば危険ですよ義妹さんや。

お前がベッドをとったから俺が床で布団をしいて寝ないといけなくなつたから、腰は痛くないかって言いたかったんだよな？

こんなギリギリの会話なんてしたら、あいつが勘違いするかも知れないんだけど・・・

「ふ、ふ、不潔よー！ケイタ！義理とはいえ兄と妹が、そんな・・・」

「

やつぱり！こいつの勘違いは激しいんだよ！

たぶん、タクヤのほうは大丈夫だらうけど・・・

「腰ね～。痛いのは嫌か～。毎晩毎晩お楽しみのよつだな。」

「やつぱりもか！」

おいー！義妹！お前の危険な言い方のせ이다！責任取れ！

と思つて義妹のほつを見ると

「やつ

つて笑つてますよ。

「こいつ、これが目的か・・・

その後、誤解を解くのに毎休みを時間いっぱい使つた。

ちなみに弁当は義妹が食べ終えたあとだつた。

あいつ、始めるからこのつもりだつたのか。

やられた～

### 3回目 曜休み（後書き）

みなさんのおかげで、あつとこつまに総表示回数が500を超えた。  
した。

もうすぐで1000に乗りそうです。

もしよければ評価、感想のほうもよろしくお願ひします。

## 4日目 激辛スペゲッティと激甘シチュー

「義兄さん、おなかすいたー。」

「テレビを見ながら寝転がっているアヤナがわめいている。

「自分で作れ。」

俺は今自分の宿題で忙しいのだ。

「やだーめんぢくわーー。」

「なら、我慢しや。」

「ああ、お義父さん、お母さん。お義兄ちゃんはかわいい義妹にご飯も作ってくれません。でも心配しないでください、アヤナはめげません。」

なんか後ろで悲劇のヒロイーンを氣取っているが無視。

「むー。義兄さんのケチー。」

「なんとでも言いなわー。」

「義兄さんのバカ、変態、スケベ、あんぽんたん・・・」

はつまつは痛くもかゆくもないね

「・・・@@@@`、×、、×ー。」

お~おい、伏字になるよ!」とまで叫ってきたぞ。

「中学生のときの文化祭で女の子に手紙をもらつたけど実はそれは  
「スト~~~~~ッフ!」

なぜお前がそのことを知っている。

それは俺の過去の過去の一つとして記憶の奥底に封印したのに

「なぜお前が知っている!」

「義兄さんのクラスのタクヤって人に聞いた。」

なるほど、やつが全ての元凶か

「じゃあ、言いふらさないから」飯作つて~。」

「却下」

「も~じゃあ、力づくでも作つてもいいからね。」

アヤナは俺の首に手を回してきた。

なんだ、色仕掛けか?

生憎だが、俺にはそんなものを通用しない・・・って!

絞まつてる絞まつてる~。

力づくって確かにそうですけど、もつと女の子らしい方法をとらなさい！

「どう？ 作ってくれる気になつた？」

いや、こゝは義兄として威厳のある態度で答へ言わねば

やつぱ無理です咲しげです。

首を縦に振つた。

俺の体が解放される。

「じゃあ、やつせと作つて。」

アヤナはテレビの前に座つた。

くそーと言いつつも大人しくご飯を作つた。

と、そんなわけあるまい。

スペゲツティを作りつつもトマトソースにたっぷりとタバスコを混ぜてやつたわ。

「ほら、スペゲツティ。」

「わ～いありがと義兄さん。」

いい笑顔を向けてくるアヤナに少し罪悪感を感じた

そして、アヤナが激辛スパゲッティを食べた。

「…………う～んおいしく～。」のピコ辛が最高だね。」

あれ？なんか高評価？

タバスコ半分くらい入れたんだけど

「お前辛いの好きなんだ・・・」

「うん。義兄さんも知つてたんでしょう。わざわざ辛いのにしてくれてありがとう。」

う～ん想定外だ。

でも、まあ喜んでくれたんなら悪くないかもな

「はい、義兄さんも。あ～ん」

「あ～ん。」

パクツ

差し出されたスパゲッティを

条件反射で食べてしまった。

もうひん、激辛で

ちなみに俺は甘党だ。

「…………から~~~~~い…………」

急いで水を飲んだが手遅れだった。

歯も口もひりひりとするレベルを超えて、痛い。

「あ、そうだ。義兄さんのご飯は私が作るね。わざわざ私のために辛いのを作ってくれたんだもん。」

にっこりと笑うアヤナ。

氣づいてこのか俺の迷惑

「義兄さんも辛いのと比べてどうが好き?」

「あ、甘いの。」

「やつか~わかった。しばらく待つてね。」

お所にひっこんだ義妹に恐れを感じた。

あいつ、どんな作るつもりなんだろ。

数時間して、アヤナが持ってきたのはシチューだった。

見た感じは普通だが

「あ、早く食べて。」

一口田を食べた。

・・・・甘い。

なんといつか甘い。

砂糖の味しかしない。

「これ、砂糖どのくらいく使つた?」

「うへんと一袋。」

一キロの砂糖を全てシチューに使つたところのか義妹よ。

「や、早く食べて食べて。シチューはまだまだあるんだから。」

台所を見てみると、湯気の出ている鍋があった。

もしかして、あれは全てシチューなのか?

「早く早く。」

た、助けてくれ。

「義妹よ。お義兄ちゃんが悪かった。もう、あんなことしないから。」

「悪かつたって何の」と、私はとつてもおこしかったよ?」

笑顔の義妹、怖いぞ。

「ち、義兄さん。あ～ん。」

アヤナがスプーンにシチューをすくって差し出してくる。  
た、助けてくれ

その後、俺は鍋いっぱいのシチューを食べるまで寝かせもらえない  
かつた。

そして全てのシチューを食べ終わった俺に義妹が笑顔で言った言葉

「明日もいじ飯作ってね。お・に・い・ちや・ん。」

はたして、俺が義妹に勝てる日は来るのだろうか。

## 5日目 バイト

「じゃあ、俺行つて来るから。」

「？」

一  
ハイト

なんのトイエマリヤナウル?」

危うく教子を失なうてしまつた

そんなことを一つに教えたらからかいに来そうで怖い。

「なん  
で？」

「 来るうたから」

「当たり前じゃん。行ってたゞふりと難癖つけるよ。」

たからたよ

ちえーっと言いながらテレビの前でプリンを食べる義妹

うん、そのプリン俺のだけどね。

「どう、義兄さん。」

「なんだ？」

「バイト代もらつたら何買つてくれるの？」

「なにを言つておるか。何も買つてなんぞやらん。

「え～ケチ～。甘いものがほし～～」

「ちなみに今食べているプリンは俺のだけど。」

「早く行かないと遅刻するよ。」

「うまくかわされたが、確かに遅刻しそうだった。」

そして、バイトが終わる時間になると  
本屋に誰かが入ってきた。

「いらっしゃいま・・・せ。つてお前がなせこじるー。」

そこにいたのはやつだつた。

「うそっ!」の人に連れてきてもうつた。

義妹の後ろから現れたのタクヤだつた。

「なにをしねる。」

「うん? いや、お前なんか遊びに行つたらバイトだつて」とおねがってさ。家に帰れ! としたらアヤナちやんに案内してくわれてたから。」

余計なことをしおつて

当の本人の義妹はとこりと、本屋の中で本を見ている。

おや? 店長が出来た。

うん? 義妹と話してるや。

おやおや? なんだか意気投合してるや?

「まつまつま、いやあ君は実に話の分かる子だね。」

「君のくらご常識ですよ。それはうう、義兄がいつもお世話になつてしまふ。」

「義兄? ああ、君がケイタくんの義妹のアヤナちやんか。」

「はい。」

「まあ、こつでも来るところ。君とは話が合つそうだ。」

「はい。じゃあ、義兄さんのバイトの日はできるだけ来させてもらいます。義兄さんのバイトの日を教えてもらわせませんか?」

なんか、バイトの口をメモしてあるんだけど

「うん、じゃあ。僕は仕事があるからこれで。ケイタくんもいい義妹をもつたものだ。」

「いえいえ、私こそ、からかげホッゲホッ、優しい義兄で幸せです。」

今あいつ絶対からかいがいがあるって言おうとしたよ。

なんか、こいつ見てにやつとこするし

そのときぽんぽんとタクヤが俺の肩をたたいていった。

「まあ、なんだ。いい義妹さんを持つたな。同情するよ。」

ああ、そうだな。

よく帰えると

「お前が余計なことをしたからだ！」

タクヤの頭を一発殴った俺は

これからバイトの時間のことを考えながら

おもむろに本を一冊手に取り

レジに向かった

「630円です。」

店員に「アルバイト情報誌の代金を渡すと  
やめやめ」と騒ぐ義妹と

哀れみの皿を向けるタクヤに挟まれて  
とぼとぼと帰った。

## 5日目 バイト（後書き）

いつの間にか早くも総表示数が1500を越えていました。  
読者の方々のおかげです。  
ありがとうございます。  
これからもがんばって書いていくので、よろしくお願いします。

## 6日目 義妹の友達

「ねえ、義兄さん。」

「なんだ？」

「今日友達が家に来るから。」

「なるほど、俺はお邪魔と言つことか、まあいいや。お義兄ちゃん  
どうかに行つてるや。」

「あ、そういうことじゃないの。邪魔なのは本当だけど・・・義兄  
さんのことを紹介しようと思つて。」

邪魔は本当なのか。

俺、なんか落ち込んできたかも。

ああ、我が理想の義妹シチュエーションはいづれか・・・

「だから、家に居てね。」

「ああ、わかつた。」

家のチャイムが鳴つた。

玄関から戻つた義妹の後ろには一人女の子がいた。

「あ、あの私、リカつて言います。あ、あの、よ、よろしくお願ひ

します。」「

深々と頭を下げてくれる。

うーん、なかなかいい子だ。

「ふーん、これがアヤナの**血縁**の義兄さんか~。あ、私はアリサ。よろしく。」

れっぽりした子だなあ。

ん?**自慢**の義兄さん?

俺?

「ちょっと、アリサーなにを変なこと言つてないかー。」

アヤナが必死になつているかわいいな~。

あんなアヤナ初めて見たよ。

「え~だつて~。いつもこつとも義兄さんの話してゐるじゃない。ねえ、リカ?」「

じへじへと頷く力任せ。

「だから、それは愚痴言つてただけじゃない~。つざことかキモイとか~。」

ショックだ。

なんか、喜んでた分をひきショックだ。

お義兄ちやんは、もう立ち直れないかもしねなによ

「あ、あの・・・落ち込まないでください。お兄さん。」

ああ、リカちやん。

君は優しいんだね。

まるで君はネロとパト裏シユを迎えて来た天使のようだよ

さあ、俺を連れて行つておくれ・・・

「あ～ほり～アヤナがひどい」と言つからび落ち込んでるよ～。

「も～まつたぐ・・・ひトリカーお兄ちやんつて!」

「え? あつー!」

はつとしたリカちやんは顔を真つ赤にした。

ゆでだこみたい。

そうだ、今度たこ焼き置つてこよう。

「わ、私、一人っ子だからお兄ちやんに憧れてて・・・つい・・・

「

真っ赤な顔でうつむいて言うリカちゃん。

うーん、これも一つの萌えか・・・

「あ～じゃあ私はケイ兄って呼ぶ。いいでしょ、ケイ兄？」

一人の女の子が上目遣いに俺を見ている。

ああ、俺はなんて幸せ者なんだ。

おとなしいひかえめな妹 リカ

元気な明るい妹 アリサ

うーん、いい。

「ああ、いいとも。一人とも俺のことを兄と思ってくれたまえ。我が妹達よ。」

「義兄さん。ちょっと後で話があるから。」

アヤナが怒ってる。

怖い。

「アヤナ。私たちにケイ兄をとられて悔しいんだよね。ケイ兄に  
がまつてもらえないから。」

「そ、そんなことあるわけないじゃない。なんで私が義兄さんに・・・

・

アヤナがうるたえている。

「こ」は義兄として

1 一緒になつてからかう 後で殺される

2 ほつとく 後でハツ当たりされる

3 義兄として一言「こ」とを言つ 好感度アップ

・・・・・3だな。

「アヤナ・・・・。」

「な、なに?」

「お前は、俺の大事なツンデレ義妹だ。」

うん。いい」と言つたな。

あれ?

アヤナもつと怒つてない?

なんか、俺に向かってきてるんだけど

「だ、だれが・・」

うん?手を振り上げてどうした?

「誰がツンデレよーーこの変態義兄ーー！」

俺が意識を失う前に見たのは

目の前まで迫る拳だった。

俺が明田のジョーならここでクロスカウンターでもおみまいできる  
のだが

あいにく俺にそんな技量はない。

まあ、いいや・・・・

俺はもう疲れたよ・・・・パトラッシュ

## 6日目 義妹の友達（後書き）

みなさんのおかげで総表示数が3000を越えました。  
これからもがんばるのでよろしくおねがいします。

## 7日目 憧れの彼女は猫被り

今日も平和な昼休み

いつも俺はタクヤと購買で買つてきたパンを食べていた。

そう、タクヤと食べていた。

断じて、田の前に学年一と言われている美女はいなかつた。

なのに、なぜ彼女はいるのだらう。

しかも、田にことしながら、そもそもどう表情で

「あの～沢尻さん？」

「エリカでいいわ。」

「エリカさんはなぜ田にいるんでしょうか？」

俺の隣のタクヤもうんうんと頷いている。

「あら？ 私がいると迷惑かしら？」

「いえ、そんなわけではないんだけど・・・。今まで俺達と接点とかなかつたよね？」

そう、今までこの人と関わつたことなんてないのだ。

ただの一度も。

クラスも違つし。

エリカさんは俺達にとつて憧れの高嶺の花であり、おいそれと話すことなんかできなかつた。

俺も一年のこころから憧れていた。

なのに、なぜここにいるのだ

「ええ、確かになかつたわよ、特に。だから、これから仲良くなつていきたいのだけど・・・迷惑かしら?」

「そういうわけではないんですけど・・・」

なんていうか、よくわからない人だ。

答えが答えになつてない。

まあ、いいか。と俺が呟くと

「お前つて本当に他人に関心がないように思われているらしー。

とタクヤがあきれたように言った。

どうやら、俺は他人に関心がないように思われているらしー。

まあ、エリカさんのことも特に気にせずにパンを食べていると

「義兄さん。」

と後ろからやつの声が

振り向くとやはじやつがいた。

「なにを企んでいる義妹よ。」

「うわっ。義兄さんは私のことをそんな風に見てたんだ～。」

当然だわ。

お前が来ればすなわち俺はピンチに陥る。

それは自然の摂理なのだ。

「あれ？ 義兄さん。エリカ先輩と知り合いなの？」

「ああ、今日からな・・・って、なんで知ってるの？」

「だつてエリカ先輩、一年にも有名だもん。」

ああ、そういうえばエリカさんは学年を問わず人気がある。

一年に名前が知れ渡つても不思議ではないか。

「あの、ケイタくん？ アヤナさんはあなたの・・・

「ああ、俺の義妹だよ・・・って・・・え？」

エリカさんがなぜ知っている。

「なんで、アヤナのこと知ってるの？」

「だつてアヤナさんつけつゝ有名よ。一年生にかわいいこがい  
るつて。」

そうだつたのが、こいつが・・・

世も末だな。

「どう? 義兄さんも鼻が高いでしょう。」

胸を張るな義妹よ。

いくり胸を張るつともお前の胸ではあまり効果がない。

「あら? ケイタくんもちょっと人気があるのよ? 落ち着いていて、  
なんだか大人っぽいつて。」

「そんな話聞いたこともないよ。」

「それは、お前が他人に興味がなさすぎるからだ。それにお前何度もラブレターもらつただろ? が、しかも俺がお前に渡すように頼まれてお前に渡してるけど一度も行かないし。」

「だつて、あれば行つたらお前が居てドッキリでした~とかそんなやつだろ?..」

どうしたみんな?

なんかため息ついたりして

「まあ、義兄さんらしいと言えば義兄さんらしいか・・・」

「やういえばアヤナ。お前何しに来たんだ?」

ああ、そうだったとアヤナ

「今日の帰り、食材買いに行くからついてきて。今日は私が『飯作

うつと思つたんだけど、うち今材料なかつたでしょ?」

「ああ、べつにいいが・・・。どうした?お前が自分から『飯をつ

くるなんて・・・」

「まあ、一人暮らしだし。気が向いたというか、鬼の霍乱というか・

・・・」

お前鬼の霍乱つて自分で言うか。

ガタンシ

あれ?エリカさん急に立ち上がりつてどうしたんだ?

「あなたたち、一人暮らししてるの?・」

「ええ、まあ・・」

「そんなのだめよ一年頃の男女が一人でなんて・」

なんだ、やつこつ」とか。

みんな結構過剰に反応するんだよなあ

「別に問題ないですよ。義理とは言え妹ですし、ここにこんなだ  
から女としてはみれませんし……。」

「でも……なにか過ちがあるとこういふ可能性も……。」

「ないですよ……まあ過ちがあつたらあつたでおおしろいかも  
もしけませんし。」

義妹よ、せりつと怖こじとを囁ひな

「ダメよー過ちなんてー。」

「あれーHリカ先輩は私たちに過ちがあつたら何が困る」とでもあ  
るんですかー?」

義妹よ、挑発するでない。

「あ、あなたたち兄妹でしょー。」

「知らないんですか?義理の兄妹つて結婚できるんですよー。」

義妹よ、それはリアルに恐ろしいぞ

「ぐつ、でもダメなものはダメよー。」

「なんでダメなんですかー?」

「ん、それは……あ、あなた後輩でしょ大人しく先輩の言ひ方と  
聞きなれーー」

「あ～せりやひじまかそりどする～。」

ああ、女同士のけんかって怖い

「とめなくていいのか？」

「タクヤ、あのがお前にとめられるのか?？」

すでにけんかはピークに達している。

「「」の × ー!黙つて言ひ」と聞け!」

エリカさん、すでに口調も変わっています。

「なによ、「」の ー。」

義妹、女の子がそんなこと言つんじゃありません。

「なんていふか、エリカさんつて、口調も変わつちやつたし。たぶん、あつちが地なんだろうな・・・」

遠くを見ながら言ひなタクヤよ。

俺達の憧れのエリカさんはまやかしだったのや。

「ああ・・・」

現実はなぜこんなにもつらいく、厳しいのだから。

ああ、チャイムが鳴つたな。

しかし、チャイムにもあるの一人を止めるとは無理なのか

きつと、これは夢なんだろう。

さあ、今日は帰つたら早めに寝よう。

## 7日目 憧れの彼女は猫被り（後書き）

総表示4000も越えました。

でも、早くも話のネタが浮かばなくなつてきました。  
365日まで続ける予定が早く終わるかもしれません。

「ときには妹よ。」

「なに?」

「合コンなるものを知つておるか?」

「知つてゐるよ。」

「実は、タクヤに誘われて行くことになつたんだけど、よくわからなくてさ~。」

タクヤのやつ、人の都合も聞かないで勝手に決めやがつて

「別に、ふつうにしてればいいんだよ。」

「なるほど、それで今日は俺いないから、はん外で食べててくれ。」

「わたしも中学の時の友達に呼ばれてるからいらないよ。」

うん。

なんか嫌な予感がひしひしとするよ。

そんなこんなで合コンでカラオケに来たけど、まだ女子のほうは来てないようだ。

来ていたのは、俺とタクヤと仮名Tだけだった。

「おい、タクヤ。今日誰が来るんだ？」

「俺の知り合いの他校の一つ下のやつが中学の時の友達呼んでくるつてさ。」

お、ドアが開いた。

来たみたいだな。

お、一人目の子は胸がでかいな

あれは〇くらいだな。

二人目の子は、すらりとしてて綺麗だなあ。

三人目の子は、うん。

俺の義妹だ。

タクヤと皿を呑わせると、タクヤは苦笑いをしてた。

そんなこんなで皿口紹介をした。

胸の大きい子がユキ

すらりとした子がX

としておひや。

「ねえねえ、ケイタさんってモテるでしょ？」

「こや、そんなことはないよ。」

「ひつひつ俺はコキちゃんに気に入られたらいい。

コキちゃんは他の男を相手にせず俺ばかりに話しかけてくる。

「えへ、じゃあ～私がねらつちやおつかな～。」

コキよ。俺の腕にしがみついてその大きな胸を当てるでない。

ジーツ

そして義妹よ。

そんなにお義兄ちゃんをみつめてくるでない。

「どうしたのアヤナ。アヤナもケイタさんをねらつてるの？」

「い、いや。私は別に……」

義妹よ。

大人しくタクヤの相手をしてやってくれ。

「そつか～まあ、あんたにはもうお相手がいるみたいだしね～。」

な、なに？！

それは初耳だ！……

「や、そんなのいなーわよー。」

「あつれ～いつつもメールでうれしあげたり言つてゐる例のお義兄ちゃんは？」

なに！

俺は嫌われてなかつたのか！

ついにシンデレのシンがデレに変わつたのか！

「そ、そんな」と言つてないわよー。」

「じゃあ、このメールはなにかなあ？ねえ、ケイタさん。ちょっとこれ見てみてよ。」

ユキちゃんが携帯を見せてくる

『ユキ元気？私は最近けつこうじに感じだよ。兄妹になつたケイタ義兄さんもいい人だし。

義兄さんつてば私がお願いすると文句言いつつも最後にはきいてくれるんだ。ホント優しいん

だよ。今度ユキにも会わせてあげたいな。』

お、お義兄ちゃん感激です。

「アヤナ、本当に俺のことを……

「うわー。コキー。向見せたのもーほー、義兄さんもこわいしな  
いー。」

あ、言ひ切った。

「え？ 義兄さん？ ……ケイタ義兄さん… …ケイタさん… …  
ああつ…………！」

『氣づかれちゃつたよ』

「ケイタさんがアヤナの義兄さんだつたんだ。びっくり。」

「ま、まあね。」

「だからか。アヤナ、私がケイタさんにかまつてばっかいるから  
ケイタさんのことこりんでたんだ。嫉妬したんだ、かわいい。」

「だ、だれが嫉妬なんて……」

「まあまあ落ち着いて。お・義・姉・ち・や・ん」

「お義姉ちゃんつて言つなーーーーー。」

ああ、なんだか合コンつて空氣じやなくなつてきたよ。

あれ？ ユキちゃんの携帯が落ちてる

あれ？ 2日前のアヤナからのメールだ

『まじひきこ。あの変態工口義兄死ね』

たつた一行のメール

お、お義兄ちゃんがそんなに嫌いか

アヤナ、お義兄ちゃんはわからないよ

ちなみに話に参加してなかつたTとXは一人でずっと楽しんでいて

くつついたという話を聞いた。

8月3日 合言葉（後書き）

4500越えました！

9日目 バイトで△

「それじゃあ、バイト行って来る。」

「あ、私も行く。」

「ダメ。」

「私は店長に用事があるんであつて義兄さんに用事があるんじゃないし。」

「こいつ、店長を理由にしちゃがつた

くそ～店長もこいつと仲良くなっちゃうよ～

本マニア同士通じるものがあるのだろうか

こいつと店長はいつも話している。

「ちわ～す。」

「こちわ～」

「ああ、こりつしゃいー人とも。」

相変わらず店の中には密の姿がほとんどない。

俺のバイト時間に来る客もあとで10人くらいだしな～

とつあえずレジにつくが暇で暇である」ことがない。

アヤナは店長と話しこんでるしな～

お、密だ。

「こりひしゃいませ～・・・Hリカさん？」

「あら? ケイタくん。こいでバイトしたの?」

「はい、Hリカさんは何か本でも探してるんですか?」

「ええ、なにか小説を読んでみようと思つて。そうだ、ケイタくん  
いい本知らないかしら?」

「俺は本はあまり詳しくは・・・・・やうだ、アヤナ!」

アヤナなら何か知つてこらだらう

「義兄さんなこいつわつーなぜこいやつが

「ああ、実はエリカさんが何かおもしろい本は無いかと言つて  
いるんだが、お前なにかおすすめの本とか無いか? お前本好きだろ。」

「じりません。」

うわつ。

「こつそんにエリカさんのが嫌いなのか。

エリカさんも険しい目をしてるし

「そり。じゃあ仕方ないわね。それじゃあケイタくん、一緒に本を探してもうれるかしら?」

「ああ、はい。わかりました。」

まあ、仕方ないだろ?。

二人はこんな調子だし。

「ちよつと待つてください!」

アヤナよ、これ以上何かあるのか。

「なにかしら?」

「義兄さんはレジにいないとダメでしょう。」

確かにレジに誰もいないのはまずいな

「店長、レジ任してもいいですか?」

「ダメです。店長は私と話しあっている最中ですから。」

おいおい義妹よ、何をそり怒つているのだ。

「あら、店長さんの仕事の邪魔はいけないわよ。アヤナちゃん。」

「ちつこの猫被りが……」

おこおこまぢこんぢやないかい？

これは……ちよひと……

「だ、誰が猫被つぢやうつぢやうのアララゴン……」

「誰がブランョー……」

ああ、もひ誰でもいいから助けてくれ

「ケイタくん。」

「あ、店。」

店長は俺にそつと本を渡した

『女性の品格』

「あとで、アヤナちやんに渡しておこへくれ。ちやんと読むよいつこと……」

店長、お気遣い感謝します。

しかし、あの一人は品格の前に躊躇するべきものがあると想つた  
です。

それにも……

ああ、今日はいい天気だなあ。

# 10日目 久しぶりだね妹たち

今日は休日。

疲れをとるために毎まで寝よう。

הנְּצָרָה

「ねえ、義兄さん。起きて！もう朝だよ！」

義妹よ、義兄は眠いのだ、疲れているのだ。

主にお前のせいで

「まだよアヤナ～。そんなじやあ起きなこいつ。お手本見せてあげる。」

ん？誰の声だ？

どこかで聞いたような……

「ねえ、ケイ兄。お・き・て」

耳元に息が吹きかけられた

ガバッと飛び起きてしまつた。

しました。

ていうか、誰がやつたんだ？

「やつ、ケイ兄。」

「なんだ、アリサちゃんか・・・それに、リカちゃんも。久しぶりだね。」

「はい。お久しぶりです。」

なんだ、二人とも遊びに来てたのか。

「で、なぜ俺を起こした。」

「「」はん、つくつて。」

義妹よ。

お前は「」はんのために義兄を起こしたのか。

お前にとつて義兄はなんなのだ。

まあ、つくるけど・・・

「アヤナ～あんたケイ兄に頼りすぎなんじゃない？」はんぐりご自分で作りなよ。」

「だつて、義兄さんのほうが上手だし。頼めばやつてくれるし・・・

」

「でも・・お兄ちゃんがかわいそつ・・」

「大丈夫。義兄さんは尻に敷かれるタイプの人だから「こんな」と苦にならないんだよ。」

「ケイ兄～こんな」と言つてますよ～。」

「まあ、可愛い義妹のためだからね。」

まあ、正直な話頼つてくれる」とはうれしいし。

別に料理が嫌いなわけでもないしな。

「ほらね。」

でも、義妹よ。

あまり頼りすぎへるでない。

ほら、無い胸を張るな。

「は～。ケイ兄も甘甘だね～美しき兄妹愛か。」

「そ、そうですね。パフェに砂糖足したみたいに甘いです・・・まるで吐き氣がするくらいに・・・」

え？

今なんかすごいこと言わなかつた？

吐き戻がるへりこ？

リカちゃん・・・？

「「へらりか。 あんたまたブラックな」と書いて。 ケイ兄「めんね  
～の子たま」ブラック入るから。」

そつだつたのか、ブラックか・・・

「「めんなさい・・・なんだかアヤナちゃんがひりやましかつたか  
ら・・・」

そつこえは、リカちゃんは兄にあこがれてたんだつたな。

「リカちゃんも好きなだけ甘えていいんだよ。」

「え・・・ほんとうですか？あ、ありがとうございます。」

「あ～ケイ兄。 リカだけずる～こ。」

「せこはこアリサちゃんも好きなだけ甘えてください。」

「やつた～。」

「うん？ 義妹よ、なぜそつも睨むのだ。」

「義兄さん。 もともとひのやましこですね～。」

義妹よ、なにを勘違にしてこる。

怖いぞ・・・

「ケイ兄～」

「お兄ちゃん・・・」

妹たちよ、あまりひつついでない。

君たちも年頃の女の子だろうに

お、リカちゃん意外と胸大きいな。

しまつた、思わず顔がにやけてしまつた。

義妹よ、だからこちらを睨むな

「義兄さんの、変態、スケベ、死んでください。」

義妹よ、義兄がなにをしたといつのだ。

義妹よ、急に立ち上がりビリした

義妹よ、フライパンなど持つてきてビリした

義妹よ、それでなにをするつもりだ

義妹よ、ふりかぶつてビリし・・・バアアアン！――

「ん？ ああ、もう夕方か。」

「うん？ なんだか頭がじんじんするも

俺は今日何をしてたんだろう。

なにも覚えてないぞ。

「義妹よ、なぜにして頭がこんなに痛むのだろうか。」

「知りません。」

「義妹よ、なぜにしてそんなに機嫌が悪いのだ。」

「そしてなぜ頭がこんなに痛いのだ。」

10日目 久しぶりだね妹たち（後書き）

ついに10000円えました！！！

1-1丑三 義妹よ、これで拭けと言つのか?~?

「義兄さん、『』飯。」

「ちよつと待つて。今このドラマがいいことにだから。」

いや~こつもながら迷探偵コナム君はハラハラさせてくれるぜ

この犯人を間違いながらも無理矢理証拠をでつちあげて事件を解決するところがおもしろいんだよな~

『犯人はあなたですね、斎藤さん。』

『そんな!私にはアリバイがあるんですよー。』

『そんなアリバイ、簡単に崩れるんですよ。つまりあなたは(プチツ)

電源が切られた!

なにをする義妹!

「何をするんだ!コナム君の迷推理が!」

「そんなことよつ、はやく『』飯~!」

「いいから早くしないとコナム君~!」

急いで電源をつけた。

『と、これであなたのアリバイは崩れた。』

『し、しかし私がやつたなんて証拠は……』

しまった……

アリバイ崩しが見られなかつた。

『証拠なら右足を見ればわかる。』

『えつー!』

周りのみんなの視線が斎藤さんの右足に集まる。

『おつと失礼。私から見て右でした。つまりあなたの左足です。』

その左足には少量の血が付いていた。

『その血は、なんですか?おそらく鈴木さんの血でしょう。あなたは鈴木さんの遺体に近寄っていない。その血を鑑定して鈴木さんの血だったとしたら……ね。』

『そ、そんな……なぜ血が……』

これは……コナム君のフフの迷探偵技の一つ『仕立て上げスナイパー』だ

みんなの視線を右足に集めてその隙に隠し持つた道具で左足に被害者の血をつけて、無理矢理

犯人に仕立て上げるという恐ろしい技だ。

あ、齊藤さん連れて行かれた。

この理不尽さと「じつけがましい」ところがいいんだよな

お、「ナム君の迷セリフを聞き忘れてはいけない

おさまりのポーズを取つて

『何が真実なのは俺が決める!』

うへん、この唯我独尊なところも最高だな。

さて、そろそろ「飯つくつてやるか

あれ?

「お前、自分で作つたのか。」

「うん、義兄さん遅かつたからね。」

あ、怒つてゐる。

額に血管浮いてるよ?

「あ、義兄さんの分のシチューもあるから食べてね。」

うへん、怒りながらも俺の分まで作ってくれるとは・・・

お義兄ちゃん感激だな

パクッ

「うん、おいしいよ。」

パクパク

パクパク

「ん？」

ギュルギュルギュル

腹の調子がおかしい

なんかまずい感じがする。

「アヤナ・・・お前まさか・・・」

そこで俺は台所にあるものに気がついてしまった。

下剤がおいてあった。

俺はトイレに走った。

そして駆け込んだ

(お聞かせづらい音)

「は～すつかり。」

そして、俺はトイレットペーパーがないのに気づいた。

「な、なに・・・あいつ・・・」

そして、代わりにあるものがおいてあった。

「紙ヤスリ・・・」

しかも荒いやつ

居間からは義妹の高笑いが聞こえてきた。

拝啓 お義母様

お元氣ですか？

心配しないでください。

義妹はたくましく育つております。

それはもう、すべすべと・・・・・・

1-1-1111 義妹よ、これで咲かと咲つかのどこ？（後書き）

15000を1つもした！

なにかわらわの記念みたいなもの書いてと頼みのですが、案が浮か  
びません。

「お姉さん、店舗

「なんだい？ ケイタ君。」

「あいつ呼ぶのもやめません？」

レジの後ろには店員用のこすに座つコーヒーを飲む義妹  
あいつ、居着いてやがる

「どうしてだい？ 僕はなかなか楽しめてもううつてゐよ。アヤナちゃんとは話があうからね。」

「俺がいじめられるんですけど・・・」

後ろではアヤナが「ヒーリーおかわり」とか言つてゐる。

あいつ、大物か

「まあまあ、あれだつて至んだ愛情表現かもしれないよ？」

「できれば真つ直ぐな愛情表現にしてほしいです。」

「でも、そんなアヤナちゃん想像できるかい？」

真つ直ぐな愛情表現のアヤナ

『義兄さん。コーヒー飲みた～い。』

『おいおい、自分で煎れるだろ?』

『だつて義兄さんの煎てくれたのがいいんだも～ん。』

『仕方ないな～。ちょっと待つて～。』

『わ～い、ありがと～。義兄さん大好き～。』

なんか、怖いな。

鳥肌が・・・

「想像したら怖くなりました。」

「はつはつは、そつだう? あれがアヤナちゃんの一番いい状態なんだよ。」

「でも、このままだと畠薙が友達になりそつで・・・」

「や」はまあ、義兄としての深い愛情で受け入れてあげられるようにならないと。』

「あいつ、俺がうどん食べてたら、七味渡すときにわざとふたをゆるめて渡すんですよ? 何度も俺が地獄うどんを食べたことか・・・」

「はつはつは、いいじゃないか。かわいいもんだよ。」

「かわいいですか・・・。」

「せうだよ。アヤナちゃんは甘えたいだけなんだよ」「義兄さん」「一  
ヒー早くしてー。わざと働く! キリキリとー馬車馬の！」とくーわた  
しのためー」「…………たぶん。」

ぶつぶつと文句言しながらもコーヒーを煎れる俺

もしかして尻に敷かれてる?

義兄としての威厳…………監無

いかんーーのまじやいかん! 義兄として威厳を持たねばーー

「まひつ。次からは自分で煎れろよ。」

ちよつと強く言つてみる。

「ん。ありがと義兄さん。」

満面の笑み

ああ、これにいつも負けるんだよ

でも、負けてもいいかも…………

「ふつ。ちよろこな。」

「アヤナちゃん・・・悪女だね・・・。」

「義兄さんはいいんですよ、あれで。」

「なんだ愛情表現だねえ。」

「万が一に愛があるとしてもそれは兄妹愛ですよ。」

「はいはー。」

## 1-2月 コーヒー煎れて（後書き）

20000も越えました！！！  
これからもがんばって書いていきます。  
そろそろ冬休みも終わりです・・・  
楽しかったですが、餅を食べ損ねたことが悔しいです。

「時に義妹よ。」

「なに?」

「なぜお前は昼休みに俺のクラスにいるのだ?しかも、その一人も。

「そう、昼休みになると、どこからともなく義妹と一人の妹たちが現れた

「ん?なんか最近会つてないとか言つから連れてきた。」

「いや~リカがケイ兄に会いたいとか言い出したからね~」

「えつ!わ、私言つてないよ。お兄ちゃん、本当だよ?」

う、うん・・・

三人が来たのはいいとしても

周りからの視線が痛い

こんな時はいつものパターンでいけば・・・

「「ケイタ――!――!」」

ほらやつぱり

「まあまあ落ち着け一人とも。」

ハルカとタクヤが現れた

「「」の一人はだれ！そしてなに！」

「あ、どうせ。私1年のアリサつて言います。」

「わ、私はリカです……1年です……」

「まあ、そうこう」とだから。」

「で、この一人が兄と呼んでいるのはなぜ？また義妹？」

それをどう説明すればいいのか……

下手な説明は誤解を招く危険がある

「あ、それは義兄さんが呼んでくれって必死に頼み込んで。はい、  
それはもう獣の「」とく。」

「おーー。」

義妹よ、俺をまた陥れるつもりか

「そ、そんなケイタ……不潔よ。」

「ああ、俺もまさかお前がそんなやつだとは……」

「あ～違うからね。ね、アリサちゃん？」

「ケイ兄が嫌がる私たちを無理矢理・・・うう・・・」

ちよつとーなに泣きおなまでしてゐるのー

うわつ二人の視線がさらに冷たく

一  
ち、  
違うよねえりかちゃん？」

「」（ホラ）・・・・・

ちょっと顔赤らめてうつむかないでよー

うう、視線が冷たくいたく・・・

- - - - -

ううつ誰か味方はいないのか・・・

救援を！救援を頼む！！

「まあまあ義兄さん。そんな義兄さんの性癖はおこころで、はいお弁当。」

「おいとくなよ！誤解を解けよ！」

「まあまあケイ兄。気いたら負けだよ。」

でも親父、俺負けないよ

「あ、そういえば義兄さん。明日お母さん達来るから。」

「なに…やつらが来るのか……」  
「ううん、俺義母さんに会つたことないな。」

「やういえばやうだね。」

「ていうか、なんで急に来る?」

「ん?なんか私と義兄さんがうまくやつてるのか気になつたからだつて。」

「ああ、神の救いか……」の義妹の虐待を義母に訴えるチャンスがいつも早く来ようとは……

「別にうまくやつてるのにねえ……ナ一からナ一まで……」

「おこ、それは誤解を招く危険がある。」

しかも、「十一寧にほそつと顔を赤らめて言こやがつて

「…………」

あれ?なんか視線が一つ増えてるんですけど

リカちゃん、アリサちゃん……君たちまで……

「ケイ兄……」

「お兄ちゃん……」

「「ケイタ」」

いやいや遅つからね

そろそろ帰つゝ君たち

「違つてー」アヤナの嘘だつてー」

「あー忘れてたー。そういう設定だつたね。」めん義兄さん……

お、お前は本当……

あ、あれ？みんなの視線が増えに増えて

クラス中が見てるんですけど……

みんな・・・信じてるの？

「や、やだなあみんな。こんなアヤナの嘘じゃないか。」

「本当ですか？」

「本当だよリカちゃん。」

「アヤナちゃん、嘘だつたの？嘘よね？」

「あ、ハルカさん・・・私は嘘つて」といふと思います。」

お前はなぜ誤解を招く言ひ方をするのだ！－

あ、ハルカが怒つてゐる

ふるふるしてゐる

「委員長として、第一回クラス裁判の開廷を宣言します－－－」

「「「「「ひおおおおおお－－－」」」」

な、なぜいひなるの？

「え～それでは、ケイタの処罰の決定会議もとい、第一回クラス裁判を開廷します。裁判長は委員長こと私、ハルカがつとめさせていただきます。」

「ていうか、処罰は決定なのか・・・

「それでは検事。彼の罪状を述べてください。」

「はい。」

「おいおいタクヤよ。お前が検事なのか。

なら原告は誰だ？

「彼、ケイタは、義理とは言え妹であるアヤナちゃんと、ちょ、チヨメチヨメしていたという可能性があります。」

「なるほど、原告の意見はどうですか、それであつていますか？」

「――死刑じゃ～！血祭りじゃ～！――」「

おいおい、クラスの男子全員が原告かよ。

「ふむ、それでは被告人。なにか言い残したことはありませんか？」

「言い残したことって、死刑決定かよ！――ていうか、よく考えたら原告がクラスのやつらっておかしいだろ。この場合、被害者はアヤ

ナであつて、アヤナが訴えを起こさないなら問題はないんじやないか？もつとも、もともとなにもないのだが。」

「それは違つ！これを見ろ！……」

タクヤが掲げた本は、『学級法 男子編』。なんじやそりや「お前は、この法律の第四条『クラスの男子は、誰か異性と関係を持つ場合、クラスの他の男子全員に相手の紹介、面接などを経た上で、70%以上の承認を得なければ関係を持つてはならない。』に反した！」

そんなものがあつたのか・・・

「よつて、我らクラス男子一同は、お前に『1週間ゲイ部に体験入部』の刑を求める。」

「ふむ、妥当な処分ね。」

「いやいや、まず冤罪だから。そこを考え直そつよ。」

「甘い、甘いわね。もはや冤罪かどうかなんてことは問題じやないのよ。」

いや、問題にしようよ・・・お願いだからね

「そつだ！俺には弁護人がいるはずだ！弁護人を！」

「うううだよ。」

なぜお前が弁護人なのだ義妹よ。

「それでは、弁護人。何か異議はありませんか?」

そうだ、こいつの口の達者さなら

やつてしまえ、義妹よ！

「異議無し。」

無いのかよ!」

「いつ、俺をどことん陥れるつもりだな」

— てらうのは冗談で

なにを考へてゐる、油断はできない。

この法には扱い六があるんです

なに！

それは真か！

やひまつやるとおなやるじやないか義妹よ。

「それは、これです！」

バンツと出てきたのは

「 「 「 「 「せわむへ」 」 」 」

せう、せれゐでゐる。

なにを考えているんだ?

「男子が異性と関係を持つ場合に適応されるのか」の法なら……

二〇

「義兄さんが男じやなくなればいいんですよ。」

義妹女、恩の事、心をこよおひ世話をひなかひ聞ひな

義兄に兄ではなく姉になれと言うのか

「異議なし」

「え？ ちょっと待つた！ それはないだろ！」

「それではこれで第一回クラス裁判を閉廷します。続いて、これより処刑執行の時間となります。」

「それでは、処刑部のみなさん入って来てください。」

ドアを開いて、ぞろぞろと覆面の男達が入ってきた。

「それでは、気合い入れていってみようか。」

「わへ、じゃな」とドーリーのなんて男じゃない。まあ、今から男じゃなくなるんだけどね。」

「悪く思つなよケイタ。」

「おこ、お前り、腕を押されるなー。」

「しょしょしょ処刑～～～！～～～！」

# シャキンシャキン

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3190d/>

---

V S 義妹な日々なのか？

2010年10月9日01時36分発行